

## 普賢菩薩と海賊

辻 憲男（文学部教授）

室（むろ）の長者は「それこそ神殿の御神体のように御簾（みす）の奥深く垂れこめている女、その分際でない者には黄金の山を積んでさえも容易に顔を見せない女、そうしてしかも、はるばると大明国から貢ぎの船が慕って来るほどにも、美貌のうわさの隠れない女」、その人がいにしえの花漆（はなうるし）の姿を現じて、七年に一度の祭の行列の中心になる（谷崎潤一郎『乱菊物語』）。

伝説の花漆は眉目うるわしく、歌舞と書にすぐれた。唐人から、四寸四方の箱に入れた八畳づくりの蚊帳（かや）を贈られたが、それを帝に献上し、賜った黄金で五つの寺を建てた。その舞い姿は、書写山の性空上人をして「生身の普賢菩薩」と観じさせた。ソレ、白象に乗って去るのを、尾をとらえてとどめるとちぎれて落ちた。それで尾ノ町という（撰集抄ほか）。谷崎の大衆小説は、それから五百年後の「かげろう御前」が主人公。贈り物が海賊に奪われ、懸賞をかけると「海竜王」を名のる若武者が現われ、ついで守護赤松氏と代官浦上氏の抗争がまき起こる。物語のなかば、賀茂明神の祭礼に、ハトが空からカスミの蚊帳を降らせるくだりは圧巻。夏の日ざかり、「わずかな気流にもゆらゆらと揺れて、透き徹る地質を虹色に光らせながら、やがてその裾でふうわりと、十二人の傾城の頭の上をすれすれに撫でた」…。

昭和5年（1930）の新聞小説。題名のとおり、この後お菊を活躍させる予定だったらしいが、作者身辺の事件により中断し、未完に終わった。



兵庫県たつの市室津。国道から尾ノ町を下り、海駅館、民俗館、賀茂神社へ。岬からの唐荷島遠望も絶佳。